

組織目標評価報告書（平成24年度）

部局名：埋蔵文化財調査研究センター

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	①平成24年度の博物館実習は、鹿田遺跡第23次発掘調査現場と本センター内で実施した。期間は8月2日～9日の間で、33名の受講生が3班に分かれ、各2日間の実習を行った。1班11人の少人数構成での実習や発掘現場での体験、そしてアンケートに代えて実施したグループ単位の発表は、協同作業を通じつつ授業の習熟度を高める上で極めて効果的であった。発掘調査への参加は、単に考古資料の取り扱いに関する知識のみならず、自らの生活の場(岡大・地元)と歴史とを強く結びつける効果を生み出し、学芸員としての本質的素養形成に寄与することとなった。
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	②③オンザジョブトレーニングの経費を獲得した。同事業で雇用した学生は、13名で所属は4部局(考古学専攻、以外に自然科学研究科・理学部・環境理工学部)にわたり、幅広い分野の学生支援を行うことができた。いずれも大学の講義や実習では体験できない社会性を身につけるなど、学生のスキルアップに資することができた。
②研究領域	自己評価
②-1 目標	①センター教員5名全員が科研費への応募を行い100%を達成している。内1名が採択されて外部資金を獲得したほか、1名が寄付金からの採択を受けている。
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	②③津島岡大遺跡における弥生水田の調査成果をもとに、岡山県教育委員会・岡山市教育委員会と連携して実施した岡山平野における初期水稲農耕に関するシンポジウムの記録を『紀要2011』に掲載し、研究の推進に努めた。
③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
③-1 目標	①文化財保護の問題について、主に岡山県教育委員会との連絡会議・主要な遺跡の保護対策委員会、あるいは開発に伴う審議会などを通じて、指導的助言を行った。
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	②職場体験は、中学校2校からの要望に応じて、3名と2名の計5名を受け入れた。11月に各3日間にわたって実施し、目標以上に学校活動への積極的協力を果たすことができた。
④センター業務	自己評価
④-1 目標	①発掘調査は鹿田地区で第23次調査(612㎡)と第24次調査(1867㎡)の2件を実施した。期間は延べ9ヵ月におよび、調査員は3名あるいは4名が対応した。記録に際しては、デジタル機器を積極的に使用し、作業の迅速化を図った。
④-2 目標とする(重要視する)客観的指標	②発掘調査において現地説明会を1回実施した。
【総括記述欄】	③鹿田第10次・18次調査の一部を1冊にまとめた発掘調査報告書を刊行した。
①発掘調査を2件実施する。②現地説明会を1～2回程度実施する。③発掘調査報告書を1冊刊行する。④紀要を1冊刊行する。⑤センター報を2回刊行する。⑥鹿田地区で2件、津島地区で1件の発掘調査資料を整理する。⑦木器保存処理を1期分行う。⑧展示会を1回開催する。⑨収蔵物のデータベース化を進める上で必要な経費獲得に努め、データベース化作業の基盤を確立する。	④⑤『紀要2011』、『センター報』48号・49号を予定通りに刊行した。
①近隣の自治体などが開催する講座などの活動への協力あるいは地域の文化財保護についての指導的助言を通じて、社会との連携や文化財行政などに寄与する。	⑥発掘調査の資料整理について、鹿田遺跡で5件、津島岡大遺跡1件を実施した。
②職場体験などの中学生等を受け入れ、社会との連携、協力に寄与する。	⑦木器保存処理は、第10期を完了し第11期の作業を行った。
③岡山県の委員会や審議会などを通じて、年間に数回は、岡山県下における文化財行政などに関する問題に助言を行う。	⑧岡山大学創立50周年記念館で2012年9月19～23日に第14回目の展示会を開催した。縄文時代の環境と植物利用をテーマとした企画展示とココガク・カフェ・講演会で全体を構成し、合計362人の参加者があった。講演会では、地質や植物関連の研究最前線を学内外から講師を招いて紹介した。
④岡山市内の中学校が行っている中学生の職場体験に対して、年間1校・生徒3人程度の受け入れを行う。	⑨保管資料のデータベース化に向けては、事業経費を計上し獲得することができた。それを受けて2名の非常勤職員を雇用して作成を進め、今後の基盤作りを完了した。

本年度は、鹿田地区において発掘調査2件をほとんど連続的に実施することとなったため、7月以降は、調査員の多くが同地区の発掘現場に常駐する状況となった。さらに運営面では任期付き助教の移動に副センター長の長期海外出張が重なるなど、例年とは異なる職場環境であったが、そうした中で、通常の業務に2つの事業を加えた当初目標を、何れの項目においても十分に達成できた点は評価しておきたい。なかでも、研究面では異分野との共同研究の高まりが様々な形で進行し、今後の可能性に期待がもてる状況を生み出した。調査の合間を縫って行った展示会でも、例年に増して多くの参加者を得ることができた。環境と考古資料を結びつけようとする試みは、盛会となった講演会でまとめられ、非常に実りある会となった。こうした展示会は地域貢献という点でも実に有意義な取り組みといえよう。今年度は、通常の業務に加えて、オンザジョブトレーニング事業と保管資料のデータベース化事業を行ったのであるが、このデータベース化事業についても、その基盤作成を完了することができた点は、今年度の一つの成果である。もう1点特筆に値するのが、本センターの将来を見据えた体制作りの中で、テニユアトラック導入を決定した点である。現在の任期制では求めにくい安定した人材確保を目指したものであり、今後の人事体制に対して大きな前進と評価されよう。こうした人事面での安定化によって、近年の発掘調査の連続から報告書刊行の遅延を余儀なくされている状況を改善していきたい。